

「オネエ所長の調査ファイル」 # 10

山崎浩治

1

「着物を着れば女っぽりが上がるわ。色気だって5割増しよ」

「所長は衣装持ちですね。その衣装、どこで買ってるんです？ やっぱ、ネット通販ですか」

「あら、やだ。あたしのお洋服はすべて死んだ恋人の形見よ」

「え……」

「最愛の彼女が亡くなった時、あたしはもう女を愛せない。だから男を棄てようと思ったのよ」

「そうだったんですか……知りませんでした」

「なんてロマンチックな過去があったら素敵なんだけどなあ」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山とイケメン調査員の透が深夜のファミレスの店内で張り込み中だ。市山は漆黒のおかっぱ頭に着物姿という市松人形のお化けのような格好で変装している。金沢市内で販売会社を経営する女性社長の美香(42歳)から「中3の娘が夜遊びして帰ってこない。何をしているか調べてほしい」と相談を受け、一人娘の優花(15歳)を尾行しているのだった。

依頼人は2年前に離婚して娘の親権を取ったが、そのころから優等生タイプだった優花の服装が乱れ、外泊が増えていく。調査を始めると、茶髪にピアスというギャルファッションの優花は連日、カラオケボックスやゲームセンターで1年先輩の美月と琴音とたむろして夜を明かしていた。平日の昼間には依頼人が会社に行っている間、学校にも登校せず、2人を家に招き入れ、たまり場にしていることも分かった。

夏休みに入った7月のある夜、3人組はファミレスで携帯電話を眺めながらヒソヒソ話をした後、美月、続いて琴音が店外に出て行った。駐車場にやってきた車に次々と乗り込むのが窓越しに見える。優花もまた、人待ち顔で駐車場の方を気にしていた。

「中坊のくせに、こんな夜中にデートじゃないでしょうね……」

透がため息をつくとき、席を立った市山が優花のいる席に向かって歩き出す。

「ちょっと、所長……！」

腰に手を当て何か言う市山に、優花が抗議するように食いかかっていた。

2

翌日の昼、市山は美香を「プライベート・リサーチ」のオフィスに呼んで、調査結果を報告した。

「娘さんはお小遣いだけでは買えないブランド品をいくつも持ってた。いくら会社を切り盛りして仕事が忙しいからって、変だとは思わなかったの？」

「薄々は気が付いていました。でも、問いただすことができなかったんです」

「どうして」

「優花は父親っ子で、私たちの離婚に反対していました。離婚の原因が私にあると思っているんです。別れた夫は私にもっと家庭にいるように望み、私は仕事を選んだから……」

「それであなたは、娘さんに対して離婚した負い目があったというわけね」

「私は優花にとって、話の分かる友達のような母親になろうと思ったんですよ」

「親が友達になってしまったら、家に親がいなくなるわ」

「思春期の娘に頭ごなしに言っても反発するだけでしょう」

「あなた、会社では部下をどう教育しているの」

「できるだけ褒めて伸ばすようにしています」

「確かに、褒めて伸びるのは部下とダンナだわ。だけどね、子供は褒めるだけじゃダメ。悪いことをしたら叱らなきゃ。あの子、援助交際してるわよ」

「えっ」

「叱る時は全身全霊で叱りなさい。子供を本気で叱るのは親しかいないんだから」

依頼人母娘はその夜、取っ組み合いの大げんかをしたという。その後、優花は先輩たちと交際を断ち切り、9月の新学期開始と同時に学校に通い始めた。しかし、それからほどなく美月と琴音が優花の顔をカッターナイフで切りつける事件が起きた。優花がグループを抜けたことに腹を立てた2人が犀川の河川敷に呼び出して制裁を行ったのだ。

3

両親の離婚は子供に大きな影響を及ぼすのに、なぜ離婚に子供の同意が必要とされないのだろう。もし離婚届に子供が署名する欄があったら、私は絶対にサインしてなかったのに、と優花は思う。

離婚後、母は優花に対して妙に甘くなり、折に触れて娘の顔色を窺うようになる。正直、うっとうしく、疲れた。ますますイライラが募って、ちょっとしたことでキレるようになったが、それでも母は優花を叱らなかった。

気持ちがふさぎ込んで学校を休みがちになり、繁華街でぶらぶらしていた時に声をかけてきたのが部活の先輩、美月と琴音だった。二人はこの春に高校に入学したものの、「ガッコが遠くて、朝起きるのがかったるい」という理由でGW過ぎには中退、ゲームセンターやカラオケボックスで時間をつぶす毎日を送っていた。家にも学校にも居場所をなくした優花にとって、二人は心のよりどころとなった。

髪を染め、親に内緒でピアスの穴を開け、厚化粧して行動をともにするうち、気が付くと一緒に援助交際を始めていた。別に先輩たちから強要されたわけじゃない。遊ぶがお金がほしかったけれど、中学生ではアルバイトができない。先輩がやっていたので私も一緒に。そんな感覚だった。買う人がいるから売る。別に減るもんじゃなし。そう思えば、罪悪感も感じなかった。

携帯電話を使って出会い系サイトにアクセスし、援助交際の相手を探す。書き込みのプロフィールは19歳。サイトでは18歳未満の年齢を入力できないからだ。値段はイチゴ(1万5000円)。出張で金沢に来たというサラリーマンは気前がよく、小遣いを弾んでくれることが多かった。

ある夜、ファミレスの店内で約束した男を待っていると、着物を着た妖怪みたいなオネエが「あんたは100グラムいくら？」と声をかけてきた。

「は？」

ガン飛ばすと、女装の妖怪が答えた。

「体を売るってことは1パックいくらのお刺身やお肉と同じになるということよ。あんた自身にどんな価値があっても、お金でしか評価してもらえない。あんたはそれでいいの？」

「おっさん、マジうけるんですけど。うぜえ、あっち行け！」

優花が眉間にシワを寄せて、威嚇した。

4

命に別状はなかったものの、優花の顔には生々しい傷跡が残った。加害者の2人は警察に補導され、その親に依頼された弁護士が優花の自宅を訪ねてきた。

「弁護士は慰謝料100万円で示談にしてほしい、と言ってきました。娘の顔に傷をつけておいて、たった100万円とは。人をバカにするにもほどがあります！」

「金沢プライベート・リサーチ」に相談にやってきた美香がまくし立てると、市山が冷静に言った。

「我慢できないなら、損害賠償請求の裁判を起こしなさい。加害者の親を調べておいたわ。片方は地元中堅企業の専務、もう片方は両親とも非正規雇用の派遣社員よ。裁判の相手には専務さんの方がオススメね。賠償金は取りやすい方から取るのが鉄則だから」

立て板に水でアドバイスする市山に、依頼人が息をのんでうなずいた。

「損害賠償の金額は弁護士さんとよく相談して決めるといいけど、娘さんと加害者は友人関係だったから被害者の`過失相殺、を指摘され、減額されるかもしれないわね」

後日、依頼人は未成年者を監督する義務のある加害者の親に対し、5000万円の損害賠償を求めて提訴し、数カ月後、和解が成立した。3000万円を毎月約10万円、30年近くにわたって支払うのが条件だという。依頼人から報告を受けた市山が言った。

「加害者の家も放任家庭だったらしいけど、放任の代償が3000万円とは高かついたものね。向こうの家はこれから`損害賠償貧乏、の始まりよ」

「加害者の親はいま50代。30年間も賠償金を払い続けることは不可能でしょう？」

首を傾げる透に、市山が答えた。

「裁判上の和解は確定判決と同じ効力を持つわ。親が死んだら、その子供が債務を相続するだけよ」

5

しかし、問題はそれで解決したわけではなかった。優花は翌年春、金沢市内の高校に進学したが、不登校となり、夏休み前に中退した。顔の傷跡は形成外科の治療で目立たなくなっ

たものの、うっすらと残った線状痕を気に病んで自宅に引きこもってしまったのが中退の原因だった。

依頼人から話を聞いた市山が様子を見に行くと、優花は深夜のコンビニでファッション雑誌を立ち読みしていた。一日中、自室に引きこもり、外出するのは知り合いに会わなくて済む深夜のコンビニだけ。スウェットにマスク、サンダルという格好で、本人はマスクで顔の傷跡を隠しているつもりらしい。

「スウェットにマスクって、ヤンキーの民族衣装よね」

優花の背後に立った市山は、タータンチェックのミニスカートにリボンタイ付きのブラウス、紺のハイソックスという女子高生風ファッションに身を包んでいる。振り返った優花が反射的にのけぞって「いつかのオネエ……」とつぶやく。市山が世間話のような口調で続けた。

「女の子のお洋服は膨らんだ胸がないとサマにならないのよねえ。人間には誰でもコンプレックスがあるけど、あたしの場合、この貧乳絶壁の胸」

「おっさんは男だから当然でしょ！」

眉を剃った優花が口をとがらせるが、市山はどこ吹く風である。

「ファンデやコンシーラーで傷やシミはいくらで隠せるわ。でも、あんまり塗り固め過ぎると塗り壁ババアになっちゃうし」

「だから、おっさんは塗り壁ジジイ！」

「いいから、よく聞きなさい」

強い口調で、市山が叱るように言った。

「生きてく上で大事なのは隠さないこと。ムリに隠そうとすればコンプレックスになる。隠そうとせず、オープンにした方が楽になるわ。あたしの女装とおんなじよ」

「自分は女装して男を隠してるくせに。言ってることが辻褃合っていないじゃん」

「あらヤダ、ホント。でも、辻褃合っていないからオネエやってんじゃない。もともと優等生だったあんたがヤンキーやってるのも、辻褃合っていないわよ」

「……」

「どうしても隠したいものがあるなら、男の痕跡さえ完全に隠すオネエの必殺メイク、教えてあげるけど」

「いやいや、隠し切れてないから！ 男がダダ漏れしてるから！」

優花が笑い声を上げた。しばし、手をたたいて笑い続ける。

「こんなに笑ったの、久しぶり。マジわるた。笑い過ぎて涙が出るよ」

いまにも大粒の涙が瞳からこぼれ落ちそうな顔だった。優花はしばらくして高卒認定を得ようとフリースクールに通い出す。「将来、介護の仕事をしたいから大学に行きたい」と漏らしたのは、親しくなった市山とコスメや脱毛についてガールズトークを炸裂させている最中のことだった。